The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カス型動詞の一展開 ： ワラカスの成立からワラケルの派生へ
Author(s)	橋本, 行洋
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 97-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カス型動詞の一展開

――ワカラスの成立からワラケルの派生へ――

橋本行洋

はじめに

語末が～カスの形になる四段活用の他動詞、いわゆるカス型動詞については、阪倉（一九四六）以来多くの論考が[1]あり、その形態や表現価値の研究が進みつつあるが、それらの多くは中古中世の語に関するものであった。一方江戸時代以降については、青木（一九九八a、b）においてその消長の様相が体系的に述べられ、およその状況が明らかにされたものの、未だ多くの問題が残されているように思われる。

カス型動詞の一つであるワラカスは、近世以降現われたもので、現代の、若年層を中心とした口頭語表現において用いられる語である。本稿ではこのワラカスの成立を論じるとともに、そこから派生したと考えられる自動詞ワラケルの派生に言及し、両語が現代語の語彙体系の中でどのような位置付けをされて用いられているのかについて考察を加える。

なお、カス型動詞は、トドロクに接尾辞スが結合したトドロカスなどの本来型、タブルに肥大した接尾辞カスの結合したタブラカスなどの応用型に区別されるが[2]、本稿で「カス型動詞」と称する際は、特に断らない限り応用型のものを指すこととする。

一　ワラカスの意味と出自

現代語において、ワラカスという語は、例えば次のように用いられている。

1ハラポンのくるよ、首スジのいくよ、花王名人劇場等々無数の番組で笑かしてくれました。（宝島特別編集『1980年大百科』一九九〇年）

2大船渡じゃ新築で2DKで月4万。おまけに駐車場料1000円!!　笑かすよなぁ。（宝島編集部編『VOW6』一九九四年）

3一番笑かしてくれたのが町はずれのその小さな郵便局…中略…どうやらそこの郵便局は'96年秋に実施された国際郵便料金の値上げにまだ気がついていないようであった。（小田空『中国いかがですか?』二〇〇〇年）

このように、ワラカスは「滑稽な行為によって相手を笑うようにさせる」意の口頭語表現の語として用いられるが、その俗語性の故か、文献における用例は余り多くない。そこで関西の大学生を対象にアンケート調査（関西大・梅花女子大・花園大・仏教大計二〇〇名に[3]、

二〇〇〇年五月実施）を行ったところ、次のような結果であった。

ワラカスを使う：一六四名[4]（82・0％）

ワラカスを使わないが、聞いたことはある：三四名（17・0％）

ワラカスを使わないし、知らない：二名（1・0％）

すなわち、ほとんど全員がワラカスの存在を知っており、八割以上の者が「使う」と答えている。その回答の中に見られた指摘として、

4 対等な立場の人がくだけた雰囲気の中、笑わせる時に使うのではないか。（関西大・奈良・女）

のように、口語ないし俗語的表現であるというものや、

5 「おもしろいやろ?」という代りに「笑かすやろ?」といったりする。（関西大・兵庫・女）

のように、「おもしろい」意の形容詞的表現に用いるとするもの、

6 「真剣に取り組んでいるのに笑かさないで。」などと使う。小学生のころ、給食の牛乳を飲む時によく、「笑かさんといて。」という風に使った。（梅花女子大・兵庫・女）

7 何かに真剣に取り組んでいる時に、友達が横から邪魔するような感じで…「人が真面目にやってんのに、またそうやって笑かすー。」という具合に使う。（関西大・大阪・女）

のように、相手が笑ってはいけない状況にある時に無理やり笑わせようとする意であるとするものが多く見られた。また、郡（一九九七）には70・60・50代各三名、40・30代各四名の大阪市方言話者計一七名を対象とした調査が示されているが、それによれば、ワラカスを「自分で使う」一一名、「知っているが自分では使わない」六名、「知らない」0名という結果であり、比較的高い年齢層でもワラカスが用いられていることが窺われる。

ワラカスの早い例は、管見では次のような幕末頃のものである。

8 安「まて〳〵夫からァ、と。〈お払ひ箱に致し、直に与五郎をなほし跡相続いたさせべく、夫につきても与五郎の了簡、まへまへのごとく兄を置て家督は死でもいたさぬなど、固苦しき事まうし居候ては埒あかず、宜敷々々御異見なし下されたく。〉ヘン笑かしやァがらァとんちきはつつけ御異見もねへもんだ。（梅亭金鶴『柳之横櫛』三編巻之中・十五／一八五三年以後）

9 むす「トキニ呑好子、けさうちをでるときはなんだか乳ばなれがしねへやうで、大きにふさぎのむしときたが、モウこゝらまでふみだしちやア、さきをいそぐ気になるから、よつぽどわらかしてしまふじやアねへか。（仮名垣魯文『滑稽冨士詣』初編―上／一八六〇年）

また、三好一光編『江戸語辞典』（一九七一）には、

10 〈このごろ世間の人々が、笑かしゃアがる、おあいだと云ふが癖。（文久年間〈一八六一～六四年〉大津絵節「なくて七癖」）

の例が引用され、「笑かしゃあがる」が当時の流行語であったことが指摘されている。これらの例を見ると、ワラカスは本来、ワラカシャアガルなどの言い方で、江戸の口頭語表現として用いられていたことがわかる。明治期の例としては、

11 「家風に合はねえも、近所の外聞もあるもんか、笑かしやあがら。」と大きに気勢ふ。（泉鏡花『婦系図』前篇・九／一九〇七年）

というものがある。

辞書類に目を転じると、まず『和英語林集成』には、第三版（一八八六年）に、

12 WARAKASHI, -SU ワラカス t.v. (coll.) To make a per-

son laugh; i.q. *warawasem.*

という記載がある。ただし、初版（一八六七年）及び第二版（一八七二年）には登録されていない。このほか、

13わら-かす 動 四 自 令笑。㊀わらはしむ。わらふやうにす。俗語。㊁冷淡に待遇す。無情にあしらふ。俗語。（落合直文『ことばの泉』一八九八年）

14わらか・す【笑】他動サ四 話わらはす。わらふやうにす。（郁文社編輯所『辞海』修正第10版／一九一六年）

のような例があるが、多く「俗語」「口語」の注記が付されている。また、

15わらかす（笑）笑はしむること。己を侮る勿れ。「―しゃあがる」。（小峰大羽『東京語辞典』一九一七年）

のような、「東京語」を蒐集した辞書にも登録されている。

ところが、このワラカスについて、関東の大学に通う学生を対象に先程と同じ調査を行った（山田昌裕氏、平林一利氏の協力により、東海大学・明治大学・立正大学・大妻短期大学・埼玉短期大学の学生計三〇一名に[5]二〇〇〇年六月実施）ところ、

ワラカスを使う：九六名（31・9％）

ワラカスを使わないが、聞いたことはある：一三三名（44・2％）

ワラカスを使わないし、知らない：七二名（23・9％）

という結果となった。すなわち、ワラカスという言葉を知っている者は全体の四分の三に及ぶが、ワラカスを「使う」と答えた学生は三割強に留まるのである。また、関東・関西の学生ともにワラカスを「関西（大阪）弁である」と回答する者が多くあり、また関東の学生のうち「聞いたことがある」と答えた者の中には、「関西のお笑い芸人が使っているのを聞いた」と答えるものが目立った。『なにわ吉本青春日記 わらかしたろか！』（畑嶺明著／一九九六年）というような書名も、「関西のお笑い芸人」の発する言葉をイメージして付けられたものであろう。

以上のように、かつて江戸東京において用いられていたワラカスは衰退し、近年ではむしろ関西の言葉と意識されている。また関東においては、関西から進出した芸能人などを媒介に新しく入ってきた「関西弁」として、ワラカスが受容されつつあるようである。現行の国語辞書において、「古語」とするもの（『広辞林』第六版[6]／一九八三年）がある一方、「俗語」とするもの（『三省堂国語辞典』第四版[7]／一九九二年）もあって、矛盾があるように見えるのは、右のような事情によるものと考えられる。

二 ワラカスの成立

ワラカスはワラハカス[8]に基づく語とされる。[9]ワラハカスは、自動詞ワラフにカスが接したカス型動詞で、次に掲げるように平安時代から用例が認められる。

16入道、「己ハ、口ツヽニ侍レバ、人ノ咲ヒ給フ許ノ物語モ知リ不侍ラ。然ハ有ドモ、咲ハムトゲニ有ラバ、咲シ奉ラムカシ」ト云ケレバ、女房ハ、「否不為、只咲ハカサムト有ルハ、猿楽ヲシ給フカ。其レハ物語ニモ増ル事ニテコソ有ラメ」ト云テ咲ケレバ、入道「然モ不侍ラ。只咲カシ奉ラムト思フ事ノ侍ル也」ト云ケレバ、女房、「此ハ何事。然ラバ疾ク咲カシ給、何々ラム」ト責ケレバ、入道、立走テ、物ヲ引提テ持来タリ。（『今昔物語集』巻二四・二二）

17猿楽（サルガク）と申は、おかしき事をいひつゞけて人をわらはかし侍るぞ

かし。（蓬左文庫蔵『源平盛衰記』三）

18笑ハカス（『俚言集覧』一七九七～一八二九年）

『和英語林集成』には初版から登録されており、

19 WARAWAKASHI, -sz, -sh'ta, ワラワカス, coll. for *wara-wasern*. To make a person laugh.

のごとく、ワラカスと同様の語釈が示されている（第二版、第三版も同）。また、

20「笑はかせやがるな。此方や、かう見えたつて、善良なる細民の同情者だ。僕に比べると、乙に上品振つて取り繕ろつてる君達の方が余つ程の悪者だ。何方が警察へ引つ張られて然るべきだか能く考へて見ろ」（夏目漱石『明暗』三五／一九一六年）

は、下一段の例であるが、先に見た「笑かしゃあがる」の例とほぼ同じ用法と見られ、やはりワラカスはワラハカスから転じたものと考えることができよう。なお、ワラハカスが現在でも西日本において用いられる語で、学生アンケートにも、

21「笑わかす」（これは標準語なのでしょうか？）の〝わ〟が略されて「笑かす」となったのではと考えましたが、どうなのでしょう。参考までに、「笑わかす」の使用例は『○○ちゃんが笑わかすー。』（梅花女子大・愛媛・女）

22口で言う時は、「わらかす」と言うけど、文字（ていねいに言いたい時）には、「わらわかす」と使ってます。（関西大・兵庫・女）

のような報告があった。

ところで、ワラハカス→ワラカスの変化はどのように説明されるのであろうか。同様の変化が生じたものとしては、

23ぼたんの花所望と人のいひければ、もらかすや恩にきせながよろひ草（梅盛編『口真似草』二／一六五六年）

24ヤまだちつと無心が有。かゝ様の数珠袋を春日祭におとしてじや一つぬふてしんぜたい。此きれがあらば一尺程もらかす事は成まいか。（近松門左衛門『持統天皇歌軍法』一七一四年以後）

25かゝりを越して逸れる鞠、塀の外面へ飛来れば、こりや好き物を下されしと、安珍軈て拾ふ内、腰元どもが取に出て、悪洒落な山伏さん、戻して〳〵もらかしてと、縋れば（並木宗輔『道成寺現在蛇鱗』三／一七四二年）

のような、モラハカス（モラフ＋カス）→モラカスの例が存する。

岸田（一九八四）は、「頭子音を持つア列音節の脱落」の現象について、「ア列音節のあとにおいて脱落するものがもっとも多く見られ」るとし、カス型動詞の例として、モラハカス→モラカス、ワラハカス→ワラカスを掲げている。ただし、管見の範囲では、カス型動詞においてこのような変化を生じているのはこの二語だけであり、例えばクサラカス、トガラカス、ハヤラカス、アマヤカスなどは、これと同じ条件を備えているにもかかわらず、*クサカス、*トガカス、*ハヤカス、*アマカスのような脱落形を生じていない。これを単なる偶然と見ることもできるが、モラカス・ワラカスの場合、変化によって生じた形が、何れも～ラカスになるという点が注意される。応用型のカス型動詞には、～ラカスの形を取るものが多く、蜂矢（一九九一）によると、室町時代までに見られるカス型動詞一〇一例中、～ラカスが五七例と最も多く、～ハカスの一〇例、～マカスの七例、～ヤカスの六例、～バカスの四例などを圧倒しており、しかも時代が下るほど、「カスの直上の音節はラに集中して行く様子

が窺われる」としている。このように、カス型動詞において～ラカスの形が優勢であることは、～ラカスがいわば「最も落ち着きの良い形」であるとの認識を生じさせることとなる。例えば、カスの上にラが膠着して再肥大した接尾辞ラカスが、右のような状況の下で生じたことは、既に阪倉（一九四六）及び蜂矢（一九九一）の指摘するところであるが、モラカス・ワラカスの成立と安定に際しても、これと同様の理由が働いたものと考えられる。

三　ワラケルの意味と出自

ワラケルという語は、現行一般の小型国語辞書にはもちろん、大型辞書にも登録が見られない。また活字資料の例としては、

26ハラで笑って 背スジでふるえる映画!! 何この映画？ デタラメじゃん。無責任じゃん。バカバカしくて ワラけちゃうじゃん。でもブルッと怖いんだよね、明日にでも現実んなりそうだから。――しりあがり寿（映画『CLAZY LIPS 発狂する唇』の広告チラシ／二〇〇〇年）

の例が管見に入った程度である。しかし関西の大学生対象調査では、

ワラケルを使う：一四七名[10]（73・5％）
ワラケルを使わないが、聞いたことはある：四一名（20・5％）
ワラケルを使わないし、知らない：一二名（6・0％）

という結果で、使用率はワラカスの場合よりやや下がるものの、「使う」と回答するものが圧倒的に多く、その回答中には、

27話し言葉で、「笑える」という時に使う。…中略…特に友達同志でふざけ合って、「アホやな」とかと一緒に使う。話し言葉以外では使わない。（梅花女子大・滋賀・女）

28文章で書く時には、ほとんど使いません。使うと、なにか変な感じになるから。（関西大・兵庫・女）

のように口語性・俗語性を指摘するもののほか、多数見られたのは、

29一番良く使うのは、笑うといけない時に、誰か、友人なんかに笑わされてしまいそうになって我慢している時、不意に笑わされた時だと思う。（梅花女子大・大阪・女）
30笑いたくないのに笑えてきた時とか、真剣な時に笑えてきた時、（笑ったらいけない時とかに）特定の人や物などを見ているだけでおもしろくて笑える時とかに「あの人わらけるわ」とか、「あれみてるとわらけてくるわ。」などと使う。（花園大・滋賀・女）

のように、笑いたくない、もしくは笑ってはいけない状況にも拘らず「自然と（思わず）笑ってしまう」という、自発表現に用いるという指摘であった。これはワラカスの「笑ってはいけない時に無理やり笑わせる」という意に対応するものである。このほか、

31笑ける＝おもしろいに近いと思う。（梅花女子大・大阪・女）

のような「おもしろい」「おかしい」という形容詞と類義的に用いるというものも多数見られた。一方、関東の大学における調査では、

ワラケルを使う：一五名[11]（5・0％）
ワラケルを使わないが、聞いたことはある：四八名（15・9％）
ワラケルを使わないし、知らない：二三八名（79・1％）

のごとく、「使う」「聞いたことはある」を併せても全体の二割程度に過ぎず、ワラカスの場合よりもはるかに低いレベルに留まっている。なお、ワラケルを使用する年齢層について、「京都市の一部の若年層に見られる語。老年層ではこれに相当する語がなく、「ワロテ

シマウ（笑ってしまう）」などと言う。少なくとも京都市では古い語ではない」（中井一九九七）という指摘があり、学生のアンケートにも、

32当たり前に使いすぎていて、あまり考えたことがなかったけど、よく考えると、私の母親が使っているのは聞いたことがない気がするので、世代の低い人が主に使っているのかと思いました。（関西大・京都・女）

33「笑かす」はよくお母さんとか、年上の人達が使っているのは思い出せるけど、お母さんが「笑ける」と言っているのはあまり使っていないと思う。（花園大・大阪・女）

のような回答が見られる。このように、ワラカスが比較的高い年齢層においても広く用いられているのとは対照的に、ワラケルは若年層でのみ用いられる語であることがわかる。以上のことから、ワラケルは、近時に関西において成立した語であることが窺われる。

四　ワラケルの成立

ワラケルがいつ頃から現われたのかは未詳であるが、先に見たように、その使用が若年層に限られるところから見て、かなり新しい語と考えられる。因みに管見の範囲では、

34ワラケル《動下一》笑いこける。「あんまりわらかさんといてヤ。ワラケテ何もデキヒン」。「わらかす」（他動）に対して自動詞として使う。（井之口有一・堀井令以知編『分類京都語辞典』一九七九年）

という辞書の例が早いものである。ところで、右の記載にあるように、ワラケルとワラカスは自動詞―他動詞の対応関係にあると意識されており、学生のアンケート中にも、

35「わらける」が自動詞なのに対して「わらかす」は他動詞という印象があります。（関西大・大阪・女）

のような指摘がある。このことは、ワラケルの語義を説明しようとする文章中に、

36（「笑ける」は）相手と一緒に笑うというより、自分がしたまぬけなことや、相手がした突飛な行動（話）に笑かされるといったかんじ。（関西大・兵庫・女）

37（「笑ける」を）いつ使っているとかは分からないけど、相手に笑かされたときに自然に口から出てくる。（梅花女子大・大阪・女）

のごとく、ワラカスがしばしば現われることからも窺われる。なお、ワラケルとワラカスの「無理やり笑うようにしむける」という働きかけを受けた結果、その影響を被って、ワラケルすなわち「思わず笑ってしまう」という対応は、ふつう〈使役〉と〈自発〉の関係と分析されるもので、これをワラウ―ワラカスと同様の自動詞―他動詞の対応とするのは、あるいは正確ではないかも知れない。しかし、ワラケル―ワラカスは、マケル―マカス、フヤケル―フヤカス、トロケル―トロカスなどの［-eru］―［-asu］という自他対応例と同じ形態であることに加え、他動詞が使役表現と、自動詞が自発表現と密接な関わりを持つ[12]ことを考慮すれば、一般の言語感覚において両者が自他の対応と見なされるのは、むしろ当然と言えるだろう。このように、ワラケルとワラカスは自他の対応関係にあるとされることに加え、近時は両語ともに関西で多く用いられる語であって、しかもワラケルが比較的最近に現われた語と見られることから判断す

ると、ワラケルはワラカスより派生したものという可能性が考えられる。これと類似の派生例としては、

38矢場「何サダアどふかいふ風がふいて、ツイ、フラ〳〵とひやかしに行て九ツを打て、モウすつぱりひやけたから、ぶら〳〵と帰りがけ、（瀧亭鯉丈『滑稽和合人』二上／一八四四年）

のようなヒヤカス→ヒヤケル、

39余りにさふ〳〵しきゆへ、三人の女郎もかけ来り「ヲヤ何でござへますヱ、とんだお客だヨ、きついしやれさ」などゝちやらかしても、一向聞つけずにおどりさはぐゆへ、（式亭三馬『辰巳婦言』一七九八年）

40チヤラケル　チヤラをいふなど云。チヤラを云り。（太田全斎『俚言集覧』一七九七～一八二九年頃）

のようなチャラカス→チャラケルの例があり、本来型ではあるが、

41対の絣をきて、襦袢の白襟のあいだから首いつぱいの毛糸ジャケツをのぞかしているこの青年は、…中略…そのとき今のジャケツをきてきたのだつたが、前々から白い襦袢でいたのを、それも取りかえたらしく、首と袖口とからのぞけたジャケツは黄茶色の色だけでも温かそうに見えた。（中野重治『むらぎも』八／一九五四年）

というノゾカス→ノゾケルも類例に含めることができるだろう。

このようなカス型他動詞からケル型自動詞へという派生[13]の要因として、先に掲げたトロケル―トロカス、フヤケル―フヤカス等の自他対応例（これらは自→他の派生）への類推とともに、[-asu]→[-eru]という自動詞派生の造語作用をあげることができよう。これに関しては、たとえば次のような指摘が参照される。佐久間（一九五一）は、「「ちれる」を「散る」という自動詞の代りに使うことは、口頭語ではよくあることで、口語としては、「ちらす」に対応している関係上、むしろ語感にぴったりくる趣があるのでしょう」（131頁）と述べており、チル―チラスという本来の自他対応が存するにも拘らず、[-asu]型の他動詞チラスを基準にした場合には[-eru]型の自動詞チレルが派生するという、この派生形式の造語力の強さが窺われる事例が示されている。

五　体系意識の支え・表情音

前述の学生アンケートの中には、

42笑かす＝笑わすという事も言えると思う。（梅花女子大・大阪・女）

43「笑わす」が変化して「笑かす」に変化したもの。（花園大・大阪・男）

44（「笑ける」は）話し言葉で、「笑える」という時に使う。（梅花女子大・滋賀・女）

45（「笑かす」は）「笑わす」がもとの形と思う。／（「笑ける」は）「笑える」がもとの形のような気がする。（関西大・大阪・男）

のようなワラカス―ワラケルをワラワス―ワラエルと関係づけ、そこから派生した俗語的な言い方とするものが多く見られる。ワラエルは本来、「笑うに笑えない話」のようにワラウの可能動詞として成立したもので、可能用法の見られないワラケルとは異なるものであるが、近年はワラケルと類義的な、

46あんまり辛辣な毒舌なので笑えてきたりする。（清水義範「ことばの見本市」『日本語必笑講座』二〇〇〇年）

のような自発表現や、

47以下の話は、実はまったくバカバカしいのだが、…中略…冗談として読めば、なかなか笑える話ではある。（川尻徹『ノストラダムス最後の天啓』一九九〇年）

のような「おもしろい」「おかしい」意の形容詞的用法が目立つ。[14] 後者の形容詞的なワラエルは、

48「笑える」という言い方も、自己の対象化方法の一つである。笑えるは、もともと笑ってはいけないものに、面白さを見つけたときに、あるいは、つまらないものに対し笑いをこらえている自分に対し、「笑える」と表現するのである。例えば、かつて、一世を風靡した青春ドラマなどは、新人類にとっては、まさに「笑える」対象なのである。（佐藤郡衛「新人類語」『新人類がやってきた！――管理職のための若者大研究』一九八七年）

49**笑える【わら-える】この世に絶対などないんだと思っている人が、何かを見て、とりあえず〝感動〟した時に使うコトバ。**「タモリとさんまのあのアドリブ、あれ、笑える」という時は、まあ、「おかしい」「面白い」とか、という意味だ。…中略…「笑える」には、「笑おうと思えば、笑えないことはない」という屈折したニュアンスがある。…以下略…（中野収『若者文化術語集』一九八七年）

のような指摘があることからもわかるように、いわゆる「若者語」ないし「新人類語」として、若年層を中心に広く用いられるようになったものである。ワラケルが若年層に広く用いられる背景には、このワラエルの存在が影響しているようである。[15]

以上の事実を踏まえて、ワラカス―ワラケル使用者の意識を図式化して示せば、およそ次のようになろう。

（他）　（自）
（正）ワラワス――ワラエル
＝　＝
（訛）ワラカス――→ワラケル

近世以降のカス型動詞は、チラカスやヒヤカスのように別の意味に転化したもの以外は、本来の他動詞との用法の差異が稀薄になり、多くのものはその存在価値を失って消えていった（青木一九九八a）とされるが、本来の他動詞であるワラワスと意味の上で大きな異なりが見られないワラカスやそこから派生したワラケルが、地域的な偏りはあるものの広く用いられているのは、右のような「体系意識」に支えられていることによるものではないだろうか。ワラワスは関西で多く用いられる語形であり、関東ではワラワセルの形を用いるのが一般的であるから、[16] この体系意識は関東よりも関西において生じやすく、それが関西におけるワラカス、ワラケルの高い使用率となって表われたものと考えられる。また、このような体系はワラカスの原形であるワラハカスの段階では生じにくいものであり、ワラカスおよびワラケルが広く用いられるようになった根底に、ワラハカスからワラカスへの語形変化が存在したと考えられるのである。なお、ワラカスがワラワスの、ワラケルがワラエルの俗語形・転訛形と見なされていることに関しては、ヤブル―ヤブレルに対するヤブク―ヤブケルの関係が参考になろう。ヤブク―ヤブケルはもとも

と、ヤブル―ヤブレル（破）とサク―サケル（裂）が混淆してできたものと考えられるが、旧い国語辞書には、ヤブクを「やぶるの訛」（『大日本国語辞典』『大言海』『広辞苑』初版など）とするものが多いことからもわかるように、一般にはヤブル―ヤブレルの転訛形と意識されている。[17]

（正）ヤブル――ヤブレル
　　＝　　＝
（訛）ヤブク――ヤブケル
（他）　　（自）

このようなワラカス―ワラケル、ヤブク―ヤブケルというカ行音を含む形が、「本来の形からの転訛による俗語表現」と見なされるのは、[k]という破裂音が一種の表情的な音のごとく意識されたことによるのではないだろうか。この種のものとしては、ヤハリ→ヤッパリ、アマリ→アンマリ、ヒドイ→ヒドーイのように、口調や情的表現のために促音・撥音・長音が挿入される〈挿入表情音〉があり、成人語に対する幼児語、知的伝達に対する表情表現のほか、通常語に対する俗語においてもしばしば見られる（渡辺一九九七／84～89頁）。この挿入表情音のうち、促音は破裂音、破擦音、摩擦音を伴うところから、促音と共起するこれらの音も同じく表情音と感じられるようになり、やがて促音を伴わない場合においても同様の意識が持たれるようになったのではないだろうか。ヤッパリ・ピッタリをヤッパシ・ピッタシのように言う類も、これと同様のものではないかと思われる。

おわりに

以上、近世以降におけるカス型動詞の展開の一例をワラカス―ワラケルという語をとりあげて考察した。ワラカスの成立には音韻脱落のほかに、～ラカスの形の安定性が関与していることを述べたが、これに関連して、現代の名古屋方言にラカスという肥大した接尾辞が定着し、広く用いられていることが参照されよう。また、ワラケルの成立に関しては、カス型動詞からケル型自動詞が派生することを述べたが、これについても中部地方の方言にコワカス―コワケル[18]（壊）のような例がある。本稿では触れることができなかったが、近世以降のカス型動詞を論じるにあたっては、このような方言語形をも視野に入れる必要があろう。今後の課題としたい。

（二〇〇〇・八・二八稿）

注

（1）〈参考文献〉に掲げたもののほかに、次のものなどがある。
青木博史「カス型動詞の派生」（『国語学』188一九九七・三）
松本なおみ「接尾語「＝かす」の表現価値」（『成蹊国文』12一九七八・一二）
柳田征司『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院一九九三・六

（2）阪倉（一九四六）、吉田（一九五九）等を参照。

（3）二〇〇名中、近畿地方（大阪・兵庫・京都・奈良・滋賀・和歌山）出身は一六四名。

（4）近畿出身者は「使う」と答えた者が87・2％（一六四名中一四三名）、その他は58・3％（三六名中二一名）。

（5）三〇一名中、近畿出身は五名であるが、五名ともにワラカスを「使う」と回答。

(6) 第五版までには「古語」の註記なし。
(7) 第三版までは「わらかす」の項目なし。
(8) 行論の都合上、このワラハカスと後掲のモラハカスは歴史的かなづかいで表記する。
(9) 『改修言泉』(一九二八)、『広辞苑』(一九二八)、『日本国語大辞典』(一九七六)、『大辞泉』(一九九五)、および佐久間(一九五一)等。
(10) 近畿出身者は「使う」と答えた者が80・5%(一六四名中一三二名)、その他は41・7%(三六名中一五名)。
(11) 近畿出身者五名(全員)を含む。
(12) 寺村(一九八二)285頁等を参照。
(13) チラカスに対する自動詞チラカルの場合は例外的なもののごとく思われるが、これは他動詞チラケルが介在するために生じた特殊な例と考えられる。橋本(二〇〇一)参照。
(14) 可能動詞の自発用法、形容詞化については、渋谷(一九九七)を参照。
(15) このほかワラケル安定の要因として、ニヤケルの存在を考えることができるかもしれない。この語は本来、男性が女性的な様子・ふるまいをすることを指すものであったが、現在ではにやにや笑う意に語義変化を起こしている(矢島一九九六参照)。ニヤケルとワラケルはともに〜ケルの形であるばかりでなく、ニヤケルもワラケルと同じく「自然と笑ってしまう」という自発表現に多く用いられる。したがって、声を出さずにやにや笑ってしまう意がニヤケル、声を立てて笑ってしまう意がワラケルという対応関係が生じているように思われる。
(16) 前田(一九七七)217頁等を参照。
(17) 柴田(一九七七)を参照。
(18) 岐阜県立郡上高等学校編『郡上方言』第一集(一九五二)等を参照。なおこの語の存在は、矢島正浩氏の教示によって知った。

〈参考文献〉

青木博史(一九九八a)「カス型動詞の消長」(『国語国文』67-7)
青木博史(一九九八b)「デカスの成立」(『国語語彙史の研究』17)
岸田武夫(一九八四)『国語音韻変化の研究』武蔵野書院
郡史郎(一九九七)「俚言 大阪市特有のことばと、その使用実態」(『大阪府のことば』明治書院)
阪倉篤義(一九四六)「接尾語の一考察」(『国語国文』15-11)
佐久間鼎(一九五一)『現代語日本語の表現と語法』(改訂版)厚生閣
柴田武(一九七七)「ホコロビル・ハチキレル・ヤブレル・ヤブケル」(『月刊百科』157『言葉の意味2 辞書に書いてないこと』平凡社一九七九に再掲)
渋谷勝己(一九九七)「日本語可能動詞の諸相と発展」(『大阪大学文学部紀要』33第一冊)
寺村秀夫(一九八二)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
中井幸比古(一九九七)「俚言」(『京都府のことば』明治書院)
橋本行洋(二〇〇一)「チラカルの成立」(『前田富祺先生退官記念論集 日本語日本文学の研究』同刊行会)
蜂矢真郷(一九九一)「カス型動詞の構成」(『日本古典の眺望』桜楓社)
前田勇(一九七七)『大阪弁』朝日新聞社一九七七・二
矢島正浩(一九九六)「やにさがる・にやける」(『日本語学』15-3)
吉田金彦(一九五九)「口語的表現の語彙『ーかす』」(『国語国文』28-4)
渡辺実(一九九七)『日本語史要説』岩波書店

〔附記〕本稿は第一七四回近代語研究会春期大会(二〇〇〇・五・二六、於、共立女子大学)における口頭発表に基づくものである。発表の席上及び発表後に御意見・御指導をいただいた方々、また煩雑なアンケート調査に御協力下さった平林一利、山田昌裕の両氏に対し、深謝申し上げます。

——花園大学助教授——